

水野 裕正 教授の退職を惜しむ

経済学部 教授 北 政巳

昭和46 (1971) 年4月に、開学なった八王子の創価大学に日本各地から多くの教授があつまりスタートした。現に現在の学長の若江正三博士は、カナダから戻られ最年少の経済学部の教授とられた。私も大阪大学大学院から就職して最年少の26歳の経済学部講師で勤めた。その時、新進気鋭の助教授として水野先生も名古屋の地からこられた。

水野先生は名古屋御出身で、昭和35年3月に中京大学商学部を優秀な成績で卒業され、指導教授の井上謙二先生の推薦で同年4月から2年間、一ツ橋大学商学部へ内地留学をされた。一ツ橋大学では古川栄一・宮川公男教授の許で経営学・管理統計学を専攻された。

そして昭和38年4月には、母校の中京大学商学部の専任講師として迎えられ、経営統計学を担当された。その間、昭和45年には要請され、名古屋工業大学の統計学非常勤講師を勤めておられる。

創価大学では、当時、統計学関係では年配教授陣に、専修大学からみえた計量経済学・リニヤープログラミングの砂田吉一教授、日本大学から見えた数理統計学・実験計画法の池田貞男教授、神奈川大学から見えた物価問題の理論的・実証的研究をされる加藤寛孝教授がおられ、官庁から見えた価格変動や産業労働分配を専門とされる中村厚史助教授がおられた。

水野先生は、創価大学では『個別企業の価格設定に関する諸問題。現在、カメラおよびテレビの価格形成要因の分析をめぐって生ずる品質と価格の関係を考察。さらに、その品質の変化が価格に及ぼす影響を物価変動のかかわり合いの中で追求』され、ちょうど世界経済の中で急成長する日本の軽機械工業のカメラを中心に、その価格メカニズムを探求され、極めて生活実証的な、ある意味では堅実なかたちでの研究を採択された。

この時代の研究成果を、「意識的構成体における統計法則についての一考察」（『中京商学論叢』第15巻2号（1969年10月）の他、本学の『創価経済学論集』に、「企業活動に関する一考察」（開学記念論集、1971年4月）、「UniverseとPopulationの概念について」（第2巻2号、1972年9月）、「昭和27年基準生鮮農産食品卸売物価指数の作成、昭和27～35年」（第2巻4号、1973年3月）、「CPIとWPIの乖離（含生鮮食品等）昭和30～35年」（第3巻2号、1973年9月）を次々と発表された。

しかし水野先生が多くの草創の学生たちから尊敬され慕われたのは、単なる学者ではなく、本学の教員にふさわしくヒューマニズムあふれる教育者としての振る舞いにあったと思う。先生のゼミには、国家試験受験者やなにかやってみようと思う個性ある学生が集まっていた。ゼミが必修の時代に、リベラルな学生の気持ちがかかってくれ自由をくれる水野先生のもとに集まった学

生は、今は立派な社会人として活躍されている。例えば地方で教頭になったゼミ生の活躍を聞き、先生ご夫妻が、彼らの活躍の場に行かれることもあったことを、我々は知っている。先生の温かな人間性は、創価大学運動部の合否すれすれの学生や通信教育の学生に対する愛情あふれる教育にも表れていた。私自身が水野先生から学んだ点は、その点である。私も、大学は確かに成績で順番は決まるが、卒業生の社会での活躍は、必ずしも比例関係にはない。むしろ学生時代に、自分の個性や生き方を磨いた人の方が勝利することを実感した。その点、硬式野球部の学生で今は社会人でがんばる卒業生も多く救済していただき、感謝しています。

初めての1期生が卒業した頃、水野先生は研究と教育においても、最もエネルギッシュな活動を展開された。『創価経済論集』にも、「消費者物価指数と卸売物価指数との乖離，昭和45～47年」（第4巻1号，1974年6号），「同 昭和47～49年」（第6巻1号，1976年6月）を発表され、堅実な活動を展開された。丹念に日経新聞の資料を切り抜き、集計されて計算されていた姿も懐かしい。今のような計算機械の普及はなく、出たばかりの電卓を駆使されていた。また翻訳『市場配給の若干の問題点』（共訳，文真堂，1976年3月）も出版された。そしてご自身の決めた研究に励まれ『消費者物価指数と卸売物価指数との乖離，昭和49～50年』（第7巻3号 1977年12月），「同，昭和50～52年」（第9巻3号1979年6月），「同，昭和52～53年」（『創価大学10周年記念論文集』1980年11月），「同，昭和53～54年」（10巻2号 1981年3月），「同，昭和54～55年」（11巻4号，1982年3月），さらに続けて「同，昭和55～57年」（第15巻2・3・4号 1986年3月），「同，昭和60～61年」（第16巻4号 1987年3月），「同，昭和57～60年」（第17巻1号）に公表された。

この時期に水野先生は英国のスコットランド・スターリング大学へ研究留学をされ、同大の客員教授として1年間を送られた。それゆえにか研究方向にも変化が見え、「国際貿易における政治的効果に関する一考察」（第14巻1号，1984年6月），「輸入原材料価格が輸出価格に及ぼす影響について」（第14巻2号，1984年9月），「カルドアの経済成長法則とその日本経済への適用」（第14巻3号，1984年12月），また国際活動として Causes of Growth in Japanese Economy from a Kldonian Point of View, Pakistan Economic and Social Review (Vol 23, Winter 1985) を執筆された。

水野先生は、1985（昭和60）年4月に経済学部教授になられた。この時期の研究活動をみると、一方では「統計におけるわが国税制の歪みに関する1考察」（同 第18巻1号，1988年6月）をものにされる他、ご自身の研究テーマにもどり、「消費者物価と卸売物価との乖離分析，昭和60～61年」（同 第19巻2号，1989年9月），「同，昭和60～62年」（同 第20巻1号，1990年9月），「同，昭和60～63年」（同 第20巻1234合併号，1991年3月）と地道に公表されていった。また平成に入っても、「同，昭和63年～平成2年」（同，第22巻2・3合併号，1993年3月），「同，

平成2～5年」(同 第25巻1234合併号, 1996年11月)と続けられた。いつも笑顔をたえされずに、人当たりの良い性格は事実だが、研究課題に対峙する姿勢は極めて頑固で、40年近く物価変動に関心をもたれ、消費者物価と卸売物価の乖離現象を追及されてきた。今は一般的に語られる情報ではあるが、その先鞭をつけられた水野教授は極めて大きな功績であったのではないかと思えてくる。事実、資料収集の結果を、日本の数多くの社会改良団体、つまり現在の消費者団体グループの草創の人々に供与されていたことも思い出される。

水野先生は、今風に言う派手な学者ではなかったが、頑固な自らの信念をもって、日常性の中の経済現象の究明に挑戦された偉大な学及者であった。平成18年3月、水野先生の退職にあたり、経済学部は満票を持って、名誉教授への就任が可決された。

多くのゼミ生をそだてられた。また通信教育生をそだてられた。また株式・証券研究会を作られ、学生に刺激を与えられた。さらに大好きな自転車で通学された。決して頑強な体格ではないが、人生観同様に、ご自身を謙虚に分析され自転車で颯爽と校内を走られていた。大学のサイクリング部の顧問をされ、遠くに遠征したと楽しく語られる笑顔も懐かしい。それ以上に36年間、ご一緒して、水野先生から学んだのは家庭人としての水野先生の偉大さである。奥様と仲良く、息子さん2人の教育にも成功され、なにも心配事のない素晴らしい家庭を築かれたことは尊敬に値する。

水野先生は学部を英断により、少し早く引退されたが、通信教育では暫く教えられると聞いている。教育者としての水野先生の姿がまぶしく目に映る。いつまでも若若しく、がんばっていただきたい。最後に、水野先生を始め先輩教師を思い出しつつ、思い出の、ひとつのシーンを紹介したい。それは開学まもなくの1977年のことであった。創価大学にこられた創立者に、水野先生を含む私達比較的若手の教員がご挨拶する機会があった。その時に、通常は無口の水野先生が「池田先生、このような立派な創価大学に勤めさせていただきありがとうございます」と言われた。その時、創立者が「皆さんには感謝しています。なぜなら創価大学は皆さんが来られなかったら出来なかったのです。不思議なご縁です。私は皆さん方を信じています。どうか立派な大学につくってってください。」と答えられました。私には、水野先生は、ご自身なりに、この言葉を実践されたと大きな拍手を送りたい。そして今後の人生でのご長寿と安寧をお祈り申し上げたい。